

保育者の関わりと 幼児の保育者への認知・対人的自己効力感との関連

園田 菜摘

The Relationships between Teacher's Involvement, Young Children's Perception of Teacher and Social Self-Efficacy

Natsumi SONODA

問 題

幼児期は、学習面・運動面の有能感 (Harter & Pike, 1984) や対人的自己効力感 (園田, 2016a) といった領域的な自己評価を行うようになる。これまでの研究では、幼児期の自己評価は、実際の能力よりも高い傾向があることが指摘されている (Harter & Pike, 1984; 桜井・杉原, 1985; Schneider, 1998; 園田, 2016a, など)。しかしその反面、幼児期の相対的な自己評価の低さは孤独感、引っ込み思案といった幼児の内面的な問題と関連し (Coplan, Findlay, & Nelson, 2004)、児童期以降の自己評価、社会性にも影響する (Verschueren, Buyck, & Marcoen, 2001) ことが示されており、このような自己評価の低さがどのような要因によって形成されるのか検討することの必要性が指摘されている (園田, 2016b)。

自己評価の形成に影響を与える要因として、児童期以降の子どもについては、親のしつけや養育態度 (Grove, 1980; Kawash, Keer, & Clewes, 1985; 松田・鈴木, 1988)、母親の子どもへの信頼感 (佐藤, 2009) といった、子どもの社会化の担い手

である親の影響があることが明らかにされている。一方、幼児期においては、学習面での有能感について、母親との愛着関係 (Cassidy, 1988)、母親の自立促進的な養育態度 (園田, 2013) との関連は示されているものの、研究の数がまだ非常に少なく、仲間関係での有能な振る舞いに関する自己評価である対人的自己効力感については、その形成要因が不明な点が多い。その中でも、幼児が母親や保育者をどのようにとらえているかといった認知と幼児の対人的自己効力感との関連を調べた研究 (園田, 2016b) では、母親ではなく、幼児の保育者への認知のみが対人的自己効力感に関連することが示されており、集団生活における社会化の担い手である保育者が幼児の自己評価に影響する可能性が示唆されている。しかし、幼児の自己評価の形成に影響する保育者の具体的な関わり方についてはほとんど検討されていないため、保育場面での保育者の日常的な関わりがどのように幼児の保育者への認知や対人的自己効力感の形成に影響するのかを検討することは、幼児期の自己評価の特徴を明らかにする上で重要な問題であると考えられる。

以上のことから、本研究では、日常的な園場面での保育者の関わりと幼児の保育者への認知、対人的自己効力感との関連を検討することで、幼児期の自己評価の形成要因について明らかにすることを目的とする。

方 法

対象

都内近郊の私立幼稚園の年中児1クラスを対象とし、担任保育者（女性）1名と、クラスに在籍する男児12名、女児9名の計21名の幼児を対象とした。幼児の平均月齢は4歳6ヵ月、レンジは4歳3ヵ月～5歳1ヵ月だった。

調査手続き

園での自由遊びの時間やバスの送迎待ちの時間を利用して、1名の調査者が観察および個別面接を行った。年中児クラスに進級して新しいクラスに慣れてきた5月中旬から7月初旬にかけて自由遊び時の観察調査を行い、夏休み明けの9月に幼稚園の1室で面接調査を行った。

- ① **保育者の関わり**の測定：幼児に対する保育者の関わりを測定するために、観察調査を行った。各幼児に対する1回の観察時間を20分とし、調査者が計3回ずつ幼児の行動をVTRに録画した（幼児1人あたり20分×3回＝計60分）。その後、VTRから子どもと保育者との関わりが見られたエピソードを書き出し、そこから保育者の関わりのカテゴリーを抽出していった。その際、

分析者1名が全てのカテゴリーを抽出した上でもう1名の分析者と協議し、最終的なカテゴリーを決定した。

カテゴリーの内容は、大きく「言葉かけ」と「態度」の2つに分かれ、「言葉かけ」として自発的な言葉かけが8カテゴリー、応答的な言葉かけが8カテゴリーに分けられた。「態度」については7カテゴリーが作成された。保育者の幼児に対する言動は主要なカテゴリーいずれか1つにのみカウントされた。なお、「その他」のカテゴリーは以降の分析から除外した。Table1に、カテゴリーの内容と定義、出現頻度を示す。

- ② **幼児の保育者への認知**の測定：幼児が保育者をどのようにとらえているかを測定するために、保育者への認知に関する面接調査を行った。調査は、森下(1985)の幼児用CCT (Children's Cognition of Teacher)尺度を参考に作成された、救助場面4項目、親和欲求場面4項目の計8項目の絵カードを用いた。なお、絵カードは男児用・女児用の2種類があった。

面接の手順は以下の通りである。まず、調査者が幼児に絵カードを提示しながら、「この絵は〇〇(幼児の名前)くん/ちゃんが幼稚園にいるときのお話です。よく聞いて下さい」「(絵に描かれている子どもを指差しながら)こっちが〇〇くん/ちゃんで、(絵に描かれている保育者を指差しながら)こっちが××先生(クラス担任の名前)です」という教示を与え、幼児にそれぞ

れの絵カードを見せながら、例えば「(絵に描かれている子どもを指差しながら)〇〇くん/ちゃんが『上手にできなかった』と言うと、××先生は何と言いますか」と質問し、幼児の答

えを記録用紙に記入した。質問の順序は救助場面と親和場面が交互になるよう2通りずつ作成し、ランダムに提示した。

Table1. 保育者の関わりのカテゴリー

内容	カテゴリー名	定 義	出現頻度 (%)	
言葉かけ	自発	質問	保育者から幼児へ質問する	7.57
		指示・注意	幼児に行動の指示や注意をする	8.52
		提案	幼児に「～しよう」ど提案する	9.46
		賞賛・応援	幼児を褒めたり応援したりする	1.58
		ふり発話	遊びの中で役になりきって発話する	2.21
		挨拶	朝や帰りの挨拶をする	1.58
		保育者の行動連絡	保育者が何をするか、どこへ行くかを伝える	2.52
		その他	上記以外の自発的な言葉かけをする	7.26
	応答	回答	幼児からの質問に答える	2.52
		応答的提案	幼児からの質問等に対して提案で返す	2.52
		応答的賞賛・応援	幼児からの働きかけに対して褒めたり応援したりする	4.42
		応答的ふり発話	幼児からの働きかけに対して、遊びの中での役になりきって返す	1.58
		許可	幼児が許可を求めた際に、「いいよ」と言う	1.89
		相槌	幼児からの話しかけに相槌を打つ	14.83
否定		幼児からの働きかけに対して「違う」「ダメ」などの否定的な言葉で返す	4.42	
その他	上記以外の応答的な言葉かけをする	5.68		
態度	接近	幼児に近付く	2.21	
	回避	幼児から離れる	0.95	
	肯定的身体接触	幼児の頭をなでるなど、肯定的な身体接触をする	2.21	
	否定的身体接触	幼児の手を払うなど、否定的な身体接触をする	0.63	
	遊びの中での身体接触	幼児をくすぐるなど、遊びとして身体接触をする	1.26	
	見守り	幼児の自主性に任せて手を出さずに見守る	2.21	
	無反応	幼児からの働きかけに反応しない	12.30	

尺度の評定は、CCP 尺度の評定方法(林・一谷・小嶋, 1987)に従い、それぞれの場面での幼児の反応語が幼児の欲求を受容したものか、拒否したものか、欲求とは無関係のものかに分けた。さらに、全8場面のうち受容的な反応語が出た回数を保育者への受容的認知(0~8点)、拒否的な反応語が出た回数を保育者への拒否的認知(0~8点)とした。評定は、第1評定者、第2評定者が全ての子どもの反応語についてそれぞれ独立して評定を行い、評定が一致しないものについては協議の上決定した。

③幼児の対人的自己効力感の測定： 幼児の対人的自己効力感を測定するために、保育者への認知の測定後に面接調査を行った。調査には、幼児用対人的自己効力感尺度(園田, 2016a)から、男児用・女児用の12項目の絵カードを用いた。面接の手順は以下の通りである。まず、調査者が「今日はこれからゲームをしましょう。このゲームは『どっちが〇〇(幼児の名前)くん/ちゃんに似てるかな?』というゲームです。これから絵の中の女の子/男の子が何をしているかお話ししていきます。よく聞いていて下さいね」という教示を与え、調査にとりかかった。調査の具体的な流れとしては、幼児に1枚目の絵カードを見せながら、例えば「お友だちがケンカをしています。女の子/男の子が『仲直りしなよ』と言いました」と状況を説明し、次に2枚目の絵カードを見せながら「(幼児から見て左の絵を指差して)こっちの女の子/男の子はお友だちをうまく仲直りさせることができます。(幼児から見て右

の絵を指差して)こっちの女の子/男の子はお友だちを仲直りさせることができます」と成功する子どもと成功しない子どもの絵を示し、「では、どちらが〇〇くん/ちゃんに似ていますか?」と質問し、幼児がどちらかの絵を選択するのを待った。幼児が絵を選択したら、絵の下に描かれている円を指差しながら、「(大きい方の円を指して)〇〇くん/ちゃんはいつも□□なのかな?それとも(小さい方の円を指して)時々□□なのかな?」と尋ね、幼児の選択の組み合わせを記録用紙に記入した。なお、2枚目の絵カードを示す時は必ず幼児から見て左の絵から示すようにし、左の絵には成功する子どもと成功しない子どもが交互に現れるようにした。また、絵の選択後、絵の下にある円を示す時は、必ず幼児から見て左の円から示すようにした。質問の順序は似たような質問項目が連続しないよう2通り作成し、ランダムに提示した。さらに、残存効果を考慮し、最後の質問項目はいざこぎに関する場面にならないようにした。

尺度の評定は、幼児の絵の選択(対人的状況で成功する子どもと成功しない子ども)の2件法と円の大小の選択(頻度)の2件法の組み合わせにより、4段階評定で行い、12項目の合計点を対人的自己効力感(12~48点)とした。

結 果

基本的属性との関連

幼児の性別、月齢によって、保育者の関わり、幼児の保育者への認知、対人的自己

効力感に違いがあるか、t検定と相関を用いて検討した。

性別については、幼児の保育者への認知において違いがあり、女兒の方が男児よりも保育者への受容的認知が高いことが示された（男児：M=3.83, SD=2.17、女兒：M=5.78, SD=1.72、 $t=2.22, p<.05$ ）。

月齢については、保育者の関わりに関連が示され、幼児の月齢が低いほど保育者の言葉かけの「応答的ふり発話」が多いことが示された（ $r=-.56, p<.01$ ）。

幼児の保育者への認知と対人的自己効力感との関連

幼児の保育者への認知と対人的自己効力感との関連について、相関を用いて検討した。

その結果、受容的認知において関連が見られ、保育者に受容されていると認知している幼児ほど、対人的自己効力感が高いことが示された（ $r=.45, p<.05$ ）。

Table2 保育者の関わりと幼児の保育者への認知・対人的自己効力感の相関

保育者の関わり		保育者への認知		対人的自己効力感	
		受容的認知	拒否的認知		
言葉かけ	自発	質問	.33	.09	.07
		指示・注意	-.02	-.21	.16
		提案	.38+	.01	.20
		賞賛・応援	.16	-.15	-.17
		ふり発話	.49*	-.27	.49*
		挨拶	.09	.04	.15
		保育者の行動連絡	.09	-.35	.10
	応答	回答	.06	.12	.04
		応答的提案	.09	-.15	-.08
		応答的賞賛・応援	.48*	-.35	.19
		応答的ふり発話	.11	.15	.29
		許可	.04	-.04	-.03
		相槌	.32	-.06	.09
態度	否定	.30	-.19	.26	
	接近	.16	.00	.03	
	回避	.10	.14	.38+	
	肯定的身体接触	.17	-.06	-.47*	
	否定的身体接触	.14	-.19	.18	
	遊びの中での身体接触	.15	.05	.03	
	見守り	.04	.11	.03	
無反応	.13	.23	.41+		

* $p<.05$, + $p<.10$

保育者の関わりと幼児の保育者への認知・対人的自己効力感との関連

保育者の関わりと幼児の保育者への認知・対人的自己効力感との関連について、相関を用いて検

討した (Table2 参照)。

その結果、幼児の保育者への認知については、保育者の言葉かけの「ふり発話」と「応答的賞賛・応援」がそれぞれ多いほど、幼児の保育者への受容的認知が高いことが示された。また、有意ではないが、保育者の言葉かけの「提案」が多いほど、幼児の保育者への受容的認知が高い傾向が見られた。保育者の関わりと幼児の保育者への拒否的認知との間には、有意な関連は示されなかった。

保育者の関わりと幼児の対人的自己効力感については、保育者の言葉かけの「ふり発話」が多いほど、幼児の対人的自己効力感が高いことが示された。また、保育者の態度の「肯定的身体接触」が多いほど、幼児の対人的自己効力感が低いことが示された。さらに、有意ではないが、保育者の態度の「回避」が多いほど幼児の対人的自己効力感が低く、保育者の「無反応」が多いほど幼児の対人的自己効力感が高い傾向が見られた。

考 察

本研究では、幼児期に形成される自己評価の1つである対人的自己効力感や、対人的自己効力感と関連する幼児の保育者への認知が、保育者の日常的な幼児への関わりとどのように関連するのかについて検討を行った。

その結果、保育者の自発的な「ふり発話」と幼児の保育者への受容的認知、対人的自己効力感との間にそれぞれ正の相関が示され、保育者が幼児に対して遊びの中で役になりきって話す頻度が多いほど、幼児が保育者から受容されているととらえたり、対人的自己効力感が高くなる可能性があることが示唆された。本研究の対象である4~5歳頃は仲間や保育者と同じ気持ちになって空想の世界を存分に楽しむ時期であり (中島, 1992)、そのような幼児たちの空想の世界に保育者が一緒に入り込み、遊びを作り上げていくような関わり

をすることが、幼児が社会化の担い手である保育者と信頼関係を築き、仲間への振る舞いに対する自信を深めていく上で重要な役割を果たすのかもしれない。

一方、本研究では、保育者の肯定的な身体接触というポジティブな要因が、幼児の対人的自己効力感と負の関連があることが示された。さらに、有意ではないが、保育者が幼児の居る所から離れること、幼児からの働きかけに反応を返さないことといったマイナスの要因は、逆に対人的自己効力感が高いことと関連する傾向が見られた。このことから、遊び相手として大人よりも仲間重要性が増す4~5歳の時期においては、保育者が常に近くにいたり、肯定的な身体接触を多く行うことは、幼児にとって仲間と関わる機会を減らす“過保護”な関わりとなり、社会的有能さに関する自己評価を下げる結果を招くことが考えられる。

保育者が子どもを賞賛・応援する関わりは、保育者が幼児の働きかけに対して応答的に行う場合に、幼児の保育者への受容的認知の高さに関連する可能性があることが示唆された。保育者のペースで自発的に褒めるのではなく、あくまでも幼児の方から自分のことを見てほしい、認めてほしいというサインが出た際に褒めることで、幼児が「必要なタイミングで必要な応答をしてくれる人」として保育者から受容されていることを実感するのかもしれない。先行研究 (園田, 2016b) と同様に、本研究においても幼児の保育者への受容的認知は対人的自己効力感の高さと関連し、対人的自己効力感の形成において保育者への認知の重要性が再確認されたことから、保育者への認知と関連する保育者の実際の関わりの特徴を明らかにできたことは意義深いと考えられる。

本研究では、幼児期の対人的自己効力感と関連する保育者の関わりとして、遊びの中で自発的に役になり切った発話をする事と、肯定的な身体接触が少ないことの重要性を明らかにしてきたが、幼児期の自己評価の形成要因を探る研究はまだ始

まったばかりであり、いくつもの課題が残されている。まず、本研究では1つの園の年中児1クラスの担任保育者の幼児への関わりしか検討していないため、異年齢クラスも含めさらに多くのクラスを対象にした検討を行うことで、本研究で示された結果を検証していく必要があるだろう。また、本研究では自由遊び場面での保育者の関わりについて検討したが、当然ながら一斉場面、食事場面といった場面によって保育者の幼児への関わり方が異なることが考えられるため、様々な場面での保育者の関わりを取り上げて検討していく必要があるだろう。さらに、先行研究（園田，2016b）において幼児の母親への認知は対人的自己効力感と関連が見られなかったことから、本研究では保育者の関わりのみを検討したが、幼児期の有能感に関する研究では母親との愛着関係（Cassidy, 1988）、母親の養育態度（園田，2013）との関連が示されていることから、対人的自己効力感の形成に対する母親の影響についても今後は検討を進めていく必要があると考えられる。

引用文献

- Cassidy, J. 1988 Child-mother attachment and the self in six-year-olds. *Child Development*, 59, 121-134.
- Coplan, R. J., Findlay, L. C., & Nelson, L. J. 2004 Characteristics of preschoolers with lower perceived competence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 32, 399-408.
- Grove, G. A. 1980 Parental behavior and self-esteem in children. *Psychological Reports*, 47, 499-502.
- Harter, S., & Pike, R. 1984 The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- 林勝造・一谷彊・小林秀夫 1987 親に対する子どもの認知像の検査法：CCP 解 1987年第4改正版 大成出版牧野書房。
- Kawash, G. F., Keer, E. N., & Clewes, J. L. 1985 Self-

esteem in children as a function of perceived parental behavior. *Journal of Psychology*, 119, 235-242.

松田惺・鈴木眞雄 1988 家族環境及び親の養育態度と児童の効力感 愛知教育大学研究報告, 37, 87-100.

森下正康 1985 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング：教師モデルに関する受容的-拒否的態度 心理学研究, 56, 138-145.

中島誠（編） 1992 成田朋子・高橋依子・庄司留美子（著） 発達臨床心理学 ミネルヴァ書房

桜井茂男・杉原一昭 1985 幼児の有能感と社会的受容感の測定 教育心理学研究, 33, 237-242.

佐藤淑子 2009 日本の子どもと自尊心:自己主張をどう育むか 中公新書。

Schneider, W. 1998 Performance prediction in young children: Effects of skill, metacognition and wishful thinking. *Developmental Science*, 1, 291-297.

園田菜摘 2013 幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情、しつけ行動との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要II(人文科学), 15, 1-7.

園田菜摘 2016a 幼児用対人的自己効力感尺度の開発 小児保健研究, 75, 100-106.

園田菜摘 2016b 幼児の母親・保育者の養育に対する認知と対人的自己効力感との関連 乳幼児教育学研究, 25, 1-7.

Verschueren, K., Buyck, P., & Marcoen, A. 2001 Self-representations and socioemotional competence in young children: A 3-year longitudinal study. *Developmental Psychology*, 37, 126-134.

謝辞

本研究のデータ収集では、柏木麻里さんにご協力いただきました。また、調査に参加していただいた保育者、子どもたち、幼稚園の関係者の皆さまに深く感謝いたします。